

でした。

中支山砲兵隊

戦後蔣介石軍の馬教育

栃木県 井上 道太郎

生まれは栃木県の温泉地塩原町大貫六という所で、大正十一年十二月二十九日、あと数日で大正十二年正月という日でありました。家は農家ではありませんが、天理教の教師でもありました。昭和十七年十二月、矢板体育館で百人以上の壮丁が集まり（遠方の栗山村からも来ていた）、体格に自信があったので予想したとおり甲種合格二番でありました。

私は、家業の農業はせず、東京の豊島区目白の工場でモーターの捲線工として修業をしていました。入隊は昭和十八年十二月ということで、東京駅に集合は十二月八日と決められておりました。本来なら、どこそこの部隊というのですが、企図を秘匿するためだっ

たのでしょうか。

第一回集合場所の東京駅には東北、関東の人たち、栃木県からは九人ということで、駅には兵事係の軍人が待っていました。第二回目の集合場所は九州の門司です。民家へ二泊し、そこで初めて軍服に着替えさせられ、やっと兵隊の服装となりました。十二月十一日朝、門司港で乗船。

玄界灘を渡り釜山に上陸、鉄道で朝鮮半島を北上、鴨緑江を渡れば南満州、更に鉄道で西へ、満支国境山海関を越えればもう北支です。河北省に入れば石門で、そこに部隊本部がありました。部隊は独立山砲第二大隊でした。我々初年兵が四、五十人で、六個班あり、一個班七人宛ぐらいいったと記憶しております。

石門に十日ぐらい居て、中支へ移動となり、京漢線で揚子江を渡り、湖北省咸寧で教育をされました。教育隊では山砲、野砲、重砲の兵隊が教育されました。私は山砲ですので、四一式山砲について三カ月間教育を受けます。一応全般に亘って教わるのですが、結局は五番砲手ということで、砲弾の信管切りが担当であ

ります。この切り方により砲弾の破裂時間が決まるので、これも大変な任務でした。

山砲は駄載で、中隊には駄馬が二六〇頭おり、一個大隊は五個中隊ぐらいあったと思います。一期の検閲は昭和十九年四月に終わり、これで砲兵隊員となることとなります。北支には共産軍も蒋介石軍もおり、小作戦や討伐が四六時中あります。大隊に帰れば早速作戦参加です。討伐をしながら進んで行くのでした。昭和十九年四月、五月となるとすでに河南作戦は発起され、京漢線打通から、湘桂作戦へと続く大陸打通作戦の緒戦から我々は参加したことになります。

先輩たちの話を聞きますと、我々が部隊に入る前、第二次長沙作戦が終了したとのこと、何百、何千人という中国軍の死骸があり、と同時に、日本軍も中国の大軍に包囲され、ずいぶん多くの犠牲者が出たということでした。

河南作戦後期、湘桂作戦前段の独立山砲第二大隊は咸寧を出発し、岳州、新墻河の日中第一線を渡河しました。我々は第一線でないから、後方の押さえ、出沒

する共産軍の後方攪乱を防いだり、討伐したりでした。砲兵隊は砲はあっても、手元に入られると、小銃は二人に一銃しかなく、他は短剣一本だけで弱いのです。それを知って共産軍は襲うのですから、第一線で砲列を敷いている砲兵より危険が多かったです。

最後の時は、信管を零距离に切り、敵を三〇メートルぐらいに引き付け、発射します。弾丸が砲口を出た時破裂させるのです。これは、我々砲兵にとっても最後の手段で、極めて危険でありました。このようにして危機を切り抜けることもあるのです。

第三次長沙作戦（湘桂作戦）では、赤羽の工兵隊が架橋をしたりして、日本軍主力が突入したのですが、我が部隊は援護の手伝いをし、長沙の街へ入城しました。その時の私は、アマーバ赤痢のため下痢がひどかったのですが、我々初年兵はなかなか入院させてもらえませんでした。しかし、人事係の村田准尉殿の耳に入り、准尉は兵隊のことを良く面倒を見てくれて（軍隊では中隊長を父親、人事係を母親にたとえて、中隊内부를纏めていました）、入院を命ぜられ、治療を重ね

ることができて助かったのです。

私は部隊から離れて長沙に二週間ぐらいいいたのですが、一日の排便が四〇〜四三回というひどいものでした。便には腸壁の粘膜や血液が混じり、更には水便となるものであり、栄養はとれず、疲労は重なるので、あのままであったら当然、戦病死していたことでしょう。

野戦病院へ入院しても体は回復しないので、武漢大学へ約四カ月間入院しましたが、その間に盲腸炎となり、これもやっとある程度回復し退院したのですが、作戦はどんどん進展し、衡陽を陥落させ、湖南省から、広西省の在支米軍の航空基地を攻撃中でありました。従って私の原隊への復帰は不可能になっておりました。

そのため残留部隊に入り、自動廠の衛兵とか、分哨に立たされました。これは転属ではなく、勤務ということです。三カ月ぐらいいしてから、今度は武昌の兵器廠勤務に回されました。兵器廠では弾薬の入れ替えなどの勤務です。当時、武昌の在留邦人の婦人会の人々が、三十ぐらい交替で在庫の弾薬を磨いて錆びを落し

たり、整備をしていくれました。

武漢地区への空襲は、私が入院中からありましたが、武漢大学の病院には不思議にも爆弾を落しませんでしたから、我々は空襲の度に大学裏の防空壕に避難していました。武漢大学の病院には、内科・外科病棟がある大きな建物で、屋根のガラスの厚さは一センチ以上もある立派なものでした。

敵機は米軍のB 29・B 24・B 25・ロッキードP 38(双胴)やカーチスホークP 51型機などであり、先ほど申したとおり、大学の被害は無いが、武昌の街には相当被害がありました。我々の兵器廠は幸いやられなかったと記憶しています。

防空のため高射砲隊はありましたが、なかなか敵機は落ちません。しかし、野戦重砲を使ってB 29を落とすたと聞いていました。七センチの従来の高射砲では、B 29の飛ぶ高度には届かないので、口径の大きい砲でやっと落とすことができました。

私は部隊へ帰れず、そのまま兵器廠勤務を続けていましたがいつの間にか昭和二十年八月になっていまし

た。しかし、まさか終戦になるなど思ってもいませんでした。中国では負けていないので、敗れたなど全然実感がありません。これは、私達兵隊だけでなく、上官も知らなかったようです。

八月十五日、兵器廠の中隊長が「今日は天皇陛下のお話がある」と言ったので「陛下が、我々を激励されるのだろうか」と、廠内では噂がありました。ラジオから流れる陛下の声は雑音が多く良く聞き取れませんので、内容は全然判りませんでした。しかし、激励のお言葉を戴いたのだから、決意を新たに祝いをしようと思いをしました。しかし、部隊長から終戦を知らされ、一同唖然としました。そのため、折角準備した食物は働いていた中国人に全部やっしまいました。

終戦となれば、武漢の街にはテロなどもあり、日本軍は今までとは逆に住民から馬鹿にされましたが、兵器廠に居た中国の通訳は良い人達で、何でも教えてくれました。「兵器・弾薬をよこせ」と日本軍が兵器廠に来ましたが、兵器廠の部隊長命で「全部揚子江に捨てたから、渡せる兵器・弾薬は無い」と断わって、一

発の弾薬も渡さなかったのです。また「中国軍から兵器をよこせ」と言ってくるだろうから、その時は「無い」と断われと命ぜられていました。そのため、大きなトラブルも起きず済みました。我々は部隊長の命令通りに、引き続き兵器廠勤務を続けていました。

日本軍は終結ということになったのですが、私の籍は兵器廠ではない山砲隊そのままでありました。その後、日本軍は蒋介石軍に軍馬を全部渡しましたが、中国軍の兵隊は大きな日本馬の扱い方を知りません。そのため、馬部隊である山砲の私は、蒋介石軍の馬の指導員としての命を受け、中国軍人に日本馬を馴らす教育をするため、蒋介石軍としばらく生活をしていました。訓練というより、中国の兵隊に日本馬の馴らさせる程度の目的であったのでした。

そうした間にも、蒋介石軍に対し共産軍（新四軍）の攻撃がありました。その時、我々は中国軍の服装をしていたのを、日本軍の従来の軍服に着替えたので共産軍は攻撃を止めました。そして「日本軍は早く日本へ帰りなさい」と言って共産軍は他へ行ってしまう

した。

また、蒋介石軍と一緒に共産軍と戦ったこともありましたが、我々には兵器を持たせず、馬の手綱をとって、二頭も三頭も墓地の陰にかくれ、戦闘の終わるのを待ったことも、三、四回ありました。

そして、昭和二十一年二月まで蒋介石軍の馬部隊と共にありましたが、そのころからもう、国共の戦いが始まっていたのでしよう。あの日本馬は、その後どうなったかと思いが、集結地の揚子江畔に戻り、二十一年の六月まで自主抑留のような生活を続けていました。従って、かつて山砲隊にいた戦友や上官たちとは会うことはありませんでした。

いよいよ復員の命令が出たのは昭和二十一年六月中旬だったと思います。集結地から上海へ、上海乗船は六月三十一日でしたから、中支部隊では最後の復員でしょう。七月三日、長崎県佐世保上陸、遂に独立山砲に復帰することなき復員でした。港で頭から白い粉のDDTという消毒剤をかけられ、おのおのが単独、バラバラに故郷へと帰りました。

私は佐世保から三日ぐらいかかって上野に着き、東北線の野崎駅へ着くことができました。家へ帰ったのですが、便りを出していないので、自分も家の状況が判りません。家でも、便りがなければ死んでしまったのではないかと思っていたということでした。

そこへ真つ黒い服装で、半年も理髪もしない、髪の毛は伸び放題で、髭は何カ月も剃らないから、口髭、頬髭、顎髭がボウボウ、まさに、山から出てきた山賊のように見えたでしょう。しばしは、私であることが判らなかつたようで、ただびっくりしているばかりでした。

このようにして私は無事帰ることができたのですが、上海から乗船した人が、帰る途中、船の上で「天皇陛下万歳」と叫んで海に飛び込んだ人がいました。軍人としての教育が入った人だと思いました。敗戦のショックか、家族のことなのか想像はつきませんが、気の毒な人だったし、また立派な人であったのかとも、今でも忘れられません。

家に帰っても、私はマラリアがたびたび再発し、高

熱と、悪寒に悩まされること一年、体力、気力が回復するの一年ぐらいかかりました。昭和二十二年春結婚し、本籍を矢板市平野に移し、若い時からの石上の仕事を七十歳までやって、その後、農業に従事しながら現在に至っております。